

# 圧痕レプリカ法による縄文時代の敷物圧痕の復元研究

著者	真邊 彩
ファイル(説明)	博士論文全文 博士論文要旨 最終試験結果の要旨 論文審査の要旨
学位授与番号	17701甲人社研第22号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/21439">http://hdl.handle.net/10232/21439</a>

学 位 論 文 の 要 旨	
氏 名	真 邊 彩
学位論文題目	圧痕レプリカ法による縄文時代の敷物圧痕の復元研究
<p>本論は、圧痕レプリカ法を用い、縄文土器製作時に敷物とした編組製品の圧痕が残る「編物底」を復元・分析し、編物底の形成に関わる人為的背景や編組製品研究において編物底が有する考古資料としての意味を考察したものである。圧痕レプリカ法を用いた編物底の研究は初めてであり、本論での検討を通じて、現状では出土例のない南九州地方の編組製品の実体に迫るとともに、編組製品が土器製作具として使用される際の選択性についても検討した。</p> <p><b>第1章</b>では、本論で取り扱う編物底の定義を述べ、編物底をはじめとする土器に残る痕跡について取り上げ、成因や土器器体との関係をもとに分類した。また、痕跡を研究する利点と意義、および考古資料として痕跡が持つ限定的側面についてまとめた。最後に、九州地方における編物底研究の意義を述べ、本論の目的として5つの項目を提示した。</p> <p><b>第2章</b>では、敷物圧痕、特に編物底の研究史と問題点をまとめた。敷物圧痕の各種の概要を述べたのち、編物底については、7つの視点から研究史を概観した。また、出土編組製品研究の現状をまとめ、九州地方における出土編組製品の概要を述べた。以上の研究史を踏まえ、編物底研究における問題点として、①用語と分類基準に関する問題と②出土編組製品と編物底の比較研究に関する問題、の2点を挙げた。</p> <p><b>第3章</b>は、本論の第4章以降の分析に用いるレプリカ法について述べた。まず、痕跡からの陽像の復元方法に関する研究史をまとめ、レプリカ法の登場の学史的な意義を述べた。次に、編物底研究における圧痕レプリカ法の適性をまとめ、大型レプリカの作製にあたっての印象材の選択、そして縁取り法と一括充てん法というレプリカの作製方法を提示した。</p> <p><b>第4章</b>では、編物底から読み取れる資料が考古資料の中の編組製品資料においてどのように位置づけられるのかという疑問点を検討した。本章では、同一遺跡・同一時期の編組製品と編物底が出土した東京都東村山市の下宅部遺跡をケーススタディとして、出土編組製品と編物底との関係性を検討した。</p> <p>まず、本論の基礎となる編組製品の技法やパターンの概念を提示し、それらをもとにした編物底の分類基準をまとめた。検討の結果、下宅部遺跡では出土編組製品と編物底で確</p>	

認できる編組技法やパターンの数や使用される素材幅に差異があることが明らかとなった。その背景として、土器製作に適した編組製品が選択・転用された可能性を指摘した。

**第5章**では、前章での研究成果を踏まえた上で、九州地方全体に対象地域を移して検討をおこなった。まず、九州地方における縄文時代の編物底の出土状況を時期別にまとめ、最も出土例が多い縄文時代中期末～後期前葉の編物底を集成し、一部はレプリカを作製して検討した。次に、土器製作時における敷物の選択性を検証するため、無文底部および各敷物圧痕における器種や底径での使い分けの有無を検討した。集成データを基に、編物底の編組技法別の出土状況をみると、網代編みが7割を占め、また、1つのパターンが優勢となるのではなく、複数の技法やパターンで構成されているのが特徴であった。編物底と出土編組製品の編組技法の比較では、第4章での下宅部遺跡での結果と同様に、出土編組製品の組成の一部と編物底が重なるが、両者にはそれぞれにしかないパターンが存在した。さらに、編物底から読み取る編組技法や圧痕形態が、実際の編組製品のどの部位に相当するのかを明らかにした。

本章の結果から、九州地方における土器製作具として使用された編組製品は転用品が多いとした。また、基本的に敷物としての利便性が高い網代編みをより多く選択するという意識が南九州一帯に存在した可能性も指摘した。

**第6章**では、作製したレプリカをもとに、より素材に着目した分析をおこなった。素材形状の検討では、編組技法とパターンによって利用する素材形状に共通性があることを確認した。また、出土編組製品との比較から、少数ではあるが編物底と類似する例が確認でき、素材の折り返しや底部から編み上げる過程を示す構造が把握された。

素材推定では、つる植物やシダ植物をはじめ、1つの形状でも複数の素材候補が考えられ、九州地方の出土編組製品では未だ確認されていない素材を含む可能性を指摘した。編物底では、同一技法内でもパターンによって異なる素材形状が用いられており、その背景には、本来の編組製品の器種の違いや機能差があることが考えられた。また、地域に関わらず編組技法やパターンと素材形状との関係が成立しており、南九州一帯で同質の素材を用いる編組製品文化が存在したと想定した。

**終章**では、圧痕レプリカ法の導入による編物底研究の成果や、第4章以降の検討によって得られた結果を総括した。遺跡から把握できる編組製品資料には、3つのカテゴリがあり、カテゴリの形成には編組製品資料が用いられた「場」が関係するとした。また、編物底においては、土器製作具としての利便性をもとに数段階の人為的選択が働いていたと考えた。最後に、九州地方における編物底の地域差の背景として2つの仮説が想定され、土器製作時の選択に加え、生業などによっても編物底の諸相が変化する可能性を述べた。

